

人文学部における情報処理教育の試み

人文学部 齋藤 陽一

A Trial of the Training in Computer Sciences in the Faculty of Humanities

Yoichi SAITO (Faculty of Humanities)

I've been wondering what kind of training in computer sciences should be given to the students majoring in humanities. This year I had a chance to teach students how to use a computer. I taught them, for example, how to send E-mails, how to write documents for their Homepages in HTML, and so on. I gave them following requirements.

- 1) to send me E-mails which should include a) names, b) majoring subjects, c) future plans.
- 2) to change their mails into the documents for their Homepages.

If there were difficult words (which were easy for us to understand) in their mails, they had to comment on them. They had to consider the style because anyone could read their writings.

They understood the difference between private mails and public documents or articles as well as the knowledge of computers. I think we could choose such training for the students majoring in humanities.

Key words: Communication, Computer literacy

最近、教養教育における情報処理教育の必要性が叫ばれているが、人文系の学生に対する情報処理教育はいかにあるべきか、そもそも人文系の学生固有の情報処理教育は可能なのか？今年度「コミュニケーション論実習」という科目を担当するのにあたり、そのようなことを課題として授業に取り組んでみた(*1)。

ワープロ、表計算ソフトの操作の習得ということは、多くの学部で行っているであろうが、そのあとに何をやればよいのか。理科系の学部ではプログラミングということになるのだろうが、人文系の学生でもそれでよいのだろうか？BASICやC言語等のプログラミングも大切であろうが、他に何か無いのだろうか。最近ではインターネットを利用した講義も増えている。メールの利用方法の実習、いわゆるネット・サーフィンの楽しみ方を習得する授業も可能だろう。私も具体的にはインターネット用のソフトを使った。ただ、もう少し、人文科学の研究方法与密着した形での教育はあり得ないだろうかと思って次のようなことを行った。

幸い、コンピューターの操作そのものの指導や、ワー

プロ・ソフトの使い方などについては、他の教員の授業もあり、私の方は、1、2回、基礎的なことを復習した後、すぐにメールを出すということからスタートすることが出来た。私に対して自己紹介のメールを出すということを学生の第1の課題とした。その際にHTMLで記述させる(*2)ことにした。学生には、勿論それが何であるのかは説明せず、おまじないだと言って書かせた。

さて、その次の回までには学生のファイルを、人文学部のWWWサーバーにしているコンピューターに保存して、離れた部屋から学生たちに自分のホームページを見させた。この授業ではたとえば外国のWWWサーバーにつないでホームページを見たり、商用ネットの会議室の書き込みを見せたり、あるいは、私の知人に頼んでメールを出してもらい、それを読むところを見せたりということも行ったが、自分の書いたファイルをホームページとして見ることができた時の驚きがいちばん大きかったように思う。

さて、ここで第2の課題となる。学生たちに「次の

回までにこれを公開するが、そうした場合どういう問題が起きるだろうか、その問題を解決してほしい」と問いかけたのである。最初の自己紹介は私個人に当たったメールという形式をとっているために、ホームページとして公開すると勿論、いくつか問題が起こってくる。例えば、「先生は～についてはどう思われますか?」(*3)といった私的な文章は当然修正が必要である。また、人文学部の中だけで通用している言葉は説明が必要になってくる。注2を見ていただければ分かるように自己紹介の中に自分の専攻分野について書く部分があるが、ここに「～先生のゼミをとる予定」と書いている学生もいる。これを学外の人間が読んでも分かる形式にすることがその学生の課題となる。中には、例えば、「1. 新潟市」として平気な学生もいる。この「1」というのは、私とこの授業を取っている学生だけに通用する記号だということを説明して、書き直させる。

この段階ではノートパソコンを持ち込んで目の前でブラウザを起動し、ファイルをオープンして、自分の書いて来たものがどのように表示されるか、その場で確認させた。自分の出身地で丁度汚職騒ぎが起こっていた学生がいて、その説明を注の形で付けたいということになって、別のページにリンクさせる方法も教えた。そして、どういう部分に注を付ければ、全体の流れを損なわず、なおかつ十分な説明ができるのかということもついでに解説した。

このような作業を通じて、私的な手紙を一般の人々に公開されても読むに値する文章にするためには、どのような問題を解決して行くべきなのか、わずかではあるが、学生に感じとってもらえたのではないかとと思う(教員の力不足から意図したことが十分伝わらなかったのは事実だが)。学生たちは、受験勉強の小論文対策という形で、論文を書く作業を経験しているはずな

のだが、存外、自分の考えを客観的に眺め、他人が理解できる形で発表するという訓練が不足している。この授業はコンピューターの実習でありながら、結果として同時に小論文を書く訓練にもなった。結局、人文系の学生のための情報処理ということを考えた場合には、今述べたようなスタイルが選択肢の一つとなってくるのではないだろうか。資料を収集し、自らの論を組み立て、さらに注などで論旨をはっきりさせるという作業が、広義の「情報処理」である以上、それもまた当然かもしれない。

注

(*1) 実際にコンピューター関係の授業を行ったのは、第II期で、第I期には映画をビデオカメラで撮るという内容であった。

(*2) 次のような形式で書かせた。

```
<HTML>
```

```
<HEAD>
```

```
<TITLE>姓名をローマ字で</TITLE>
```

```
</HEAD>
```

```
<BODY>
```

```
<H3>姓名を漢字で</H3>
```

ここから下に本文を書く。以下のことは必ず書く。

1. 出身地

2. 何を中心に勉強しているか(または来年以降勉強するのか)

3. 自己PR(希望の就職先の人事課の人が読むという仮定で)

その他は自由

```
<A HREF="index.html">目次へ</A><P>
```

```
</BODY>
```

```
</HTML>
```

(*3) 原文はもっとくだけた文体である。